

マラテスタ逝く

十九世紀のヨーロッパが生んだ最大人物の一人であり、われ等アナキスト陣営に於ける最も純潔な思想家、最も勇敢な闘士であつた、エルリコ・マラテスタは、去る〔昭和七年〕七月二十二日正午、悪漢ムソリニ部下の厳戒の下に淋しく此世を去つた。満七十九歳。

マラテスタは一八五三年、伊太利のサンタ・マリア・カピエア・ベテレーに生れ、一八七一年のパリ・コムミュンに際して初めてインタナショナルの運動に加はつた時には、彼はナポリ大学の医学生であつた。バクニンを知つたのも同年であつたらう。翌年にはツューリッヒに赴きジュラ聯盟の人々と会し、その素樸にして元氣ある様を見ていたく感激して直ちにこれに加盟した。そして其グループの中に於ける最年少者として最も愛された。バクニンの如きは特に彼にベンジャミンといふ名を与へて、可愛がつたといふ。



これからの彼の生活、六十年の長い生活は、一日も休息の暇なき革命闘争の生活であつた。或は瑞西、仏蘭西、西班牙に、或は近東アジアに、アフリカに、或は遠い南アメリカに、常に官憲の眼を忍んでの冒険旅行を敢行して革命的煽動に転々した。その間に捕へられて獄中生活の苦を嘗めたことも幾回であつたか数へきれぬほどであつた。彼が最も長く亡命の居をすへたのはロンドンであつたが、そのロンドンに於ける単純な生活は電気機械工として維持して来た。



彼は実践的活動家であつたと同時に、思想的に非常に深いものを持つてゐた。最初に敬虔なる革命家マデニヤ、熱誠なガリバルデの感化を受けた彼は、アナキズムに於ても宗教的至誠と深さを持つていた。彼の生活と人物とはバクニンに似たものがある。彼の書いたものも、バクニンのその如く断片的ではあるが、それを集纂したならば、頗るぼう大なものが出来るであらう。のみならず、深遠な一貫した哲学が光輝を放つてゐることに、世人は驚かされるであらう。



クロポトキンとバクニンには可なり多くの子どもらしい空想性があつたが、マラテスタにはそれが無かつた。その点はルクリュと頗る近かつた。彼の無政府主義はその動機と論証とに於てクロポトキンとちがふ、とファブリは言つてゐるがその通りだ。彼は将来の社会革命に於けるアナキストの役

割を明白に認識してゐた。「暴動は勿論起るであらう。……併し若しその暴動に対して、理想のために行動する革命家達の対策が存在せぬならば、その革命は自滅するであらう。憎悪は愛を生まない。憎悪によつては世界は革新されない」と彼は言ふ。これはエリゼ・ルクリュが「無限の空間の中に呻くたゞ一声の愁訴も、総ての選ばれた人々を永久に悲しましめるに充分である」といひ、また「最も強力であること、そして愛をして物言はしむべくその強力を使用すること、それが無政府主義者の規範的行動である」と言つたのと相応するものである。



一九一九年秋の選挙に際し、諸方の集会は大赦によつて過去の罪刑が解消した彼の帰国を促がし、ロンドンの伊国領事は彼に旅券を交付した。然るに伊国政府と結托せる仏国政府はその国内の通過を許さず同じ英国政府は諸船舶への乗込を許さなかつた。その時ロンドンに來た伊太利海員聯盟の書記にして一船長たるギユリエチは彼を一海員と称して一伊国船に乗せた。彼の乗船は無電にて諸国政府に報ぜられた。けれども彼は無事にゼノア港に到着する事ができた。その船が同港に着いた時、港内の全船舶は彼に敬意を表して全労働を休止し、彼の通路には全労働者群が堵列して歓迎するのであつた。トリノや、ミラノや、ボローナの諸都市にても同様な歓迎をした。実に四十一年間の亡命の後に彼は初めて公然帰国し得たのである。一九二〇年一月末、彼は自分の演説のために逮捕されたが、その報が伝はるや否や忽ちゼネ・ストが全国に勃発したので政府は已を得ず釈放するに至つた。その年

の末には再び投獄せられ、翌年三月にはハン・ストを以て審理を要求した。その頃丁度ファッシストの暴動が起り、マラテスタ等の新聞『ユマニタ・ノヴァ』社は襲撃された。間もなく彼は釈放されたが、今度は悪漢ムソリニのために一時人質として監禁せられた。次で一九二六年、ルツエツチ事件の時、七十三歳にして投獄せられた。これが最後の入獄であつた。爾來彼は、ファッシヨの嚴戒下に極めて不自由な生活をローマにおくつた。

かくて、この偉大なる自由革命の使徒、筋肉労働の聖者で、そして人道の大戦士たる彼はこゝにその光輝赫々たる一生を終つたのである。

ゴオルドスミス女史の死

254

一
真実の意味に於けるロシヤ革命の忠実な友であり、国際アナルシストの温い同伴であつたゴオルドスミス母子が本年〔昭和八年〕一月九日と十一日とに相次いで巴里の寓居に逝去したといふ新聞の報道に接した。殊に八十三歳の老母の長い病苦を看護したマリイ・ゴオルドスミス女史は、母の最期を見届けるや、自分も直ちに毒を仰いで二日間の昏睡の後に最後の呼吸を引とつたことは、数多き同志友達を驚愕せしめ、悲しました。

私はゴオルドスミス女史には一度も会ふ機会を持たなかつたが、その著書や文書には常に非常な尊敬と信頼とを以て接してゐた。実を言ふと私は彼が女であつたことは今日まで少しも知らなかつた。たゞ彼の文章の気高さと、思想の深いのとに何時も敬服するばかりであつた。歐洲大戦の時の例の十六人間題——一九一六年講和論の盛んなりし時、クロボトキンやチエルケソフ等十六人のアナールキ

ストが講和論の宣言を發した事に就き一九二八年に至つて、その行動の正否に関する論争が起つた——に關して彼も傍觀するに忍びずして、一文を草して吾々の僚紙『ブリュ・ロアン』に掲げた。聞くところによると、さしもやかましかつた論争も彼の此一文によつて終息して了つたとのことである。その短文に彼はイジディンといふペンネームを用ひてゐる。英、仏、独等の諸雑誌にイジディン或はコハンといふ署名の文章に屢々接したが、それは皆彼女の変名であつた。私の最も啓発された彼の著作はソルボン大学教授ドラアデとの共著になつた『進化学説』である。此書は小泉丹氏によつて日本語にも訳されたと記憶する。

二

ゴオルドスミス女史の死に就ては、諸国の同僚紙が詳細に報じてゐるが、私は英國の『フリーダム』紙に掲載されたネットトラウの文章を全訳する。これが比較的簡明だから。

「真実のロシヤ革命及び國際無政府思想の最も忠実な諸友中の二人、吾々の中の總ての優れた者及び吾々大多數の友であつたこの二人は吾等を遺して他界した。一月九日、母は長年の病苦の後八十三歳を一期として絶命し、娘は母の最後の病床に侍し、その臨終を見届けるや自ら毒を仰ぎ、二日間昏睡の後その儘逝去した。かうして此の小さな愛すべき家族は消え去つた。永い年月の間その質素な家は、夕ごとに集ひ来るロシヤ及びフランスの國際的無政府思想家、革命志士等の小さな輝や

かしいオアシスであつた。そこでは種々なる意見が発表された。併しながら二人の主人の何時も変はらぬ親切な平静な真面目な態度と恰利な論究とによつて、狂信と偏狹とは自ら消え去り、忽ち力を喪ふのであつた。

三

「母は、バクニンが一八七二年の記憶すべき夏を温和なピーター・ラヴロフを伴ふてチュウリツヒに過した時、同所に於て勉強してゐた多くのロシア婦人少女達の中の一人であつた。彼女はヴェラ・フイグネル其他の元氣あるロシア青年革命家を悉く知つてゐた。その運動に彼女自ら分担した部分は少ないかも知れないが、併し爾後六十年の久しい間、彼女は常に変らず、その知識と感情とを以てこの人々の仲間として生活した。彼女は一八七〇年代に聖ペテルスブルグに於て一実証主義評論『ヅナニイ(知識)』を發行していたイジドル・ゴオルドスミスの妻になつた。彼等は北部アルカンヂエル道のピネガに追放せられたが、その地でマリイが生れた。マリイはロシアで成長したが、父が死去したので母と共に巴里で生活することになつた。そして彼女は全フランス的教育を受くべく尚ほ充分若かつた。彼女は自然科学、殊に生物学を研究し、凡て此方面に於て主に生物学の出版の助手又は副編輯者として働いた。世間には知れてゐないが、彼女は一九一五年に自然科学の博士になつた。その提出論文は『魚の生理学的及び心理学的反作用』と題するものであつた。凡そ動物心理は彼女を魅感したのである。そして一九二七年には『比較心理学』といふ一書を巴里で出版した。彼女の母は貴族の愛好家であつた。

四

「彼女等は巴里に於てピイター・ラヴロフの最も親しい友人達の仲間であつた。後には老人の方ではクロボトキンや、ギリヨームの友となり、若い方では、彼女の周囲に集つた多くの進歩的革命的ロシア青年達の友となつた。そしてマリイは、フランス学生社会主義団体の仲間になつたが、その団体は一八九〇年代の初めアナキストとなり、多くの出版物を發行し、グラープやクロボトキンや、『タン・ヌウボオ』に最も接近し、今、尚ほ同じ方面に働いてゐる。マリイ・ゴオルドスミスは最期まで彼等と共にあつた。彼女はまた、ゴゲリア、クロボトキン、シャピロ其他が發議せるロシア無政府主義出版事業を助けた。彼女の作物はパンフレットになつたものもあるが、それには大ていエム・イジデイン、マリイ・コハン等の署名を用ひてゐた。彼女は『フライ・アルバイター・ステイムメ』、『デイエロ・トリユタ』等々の読者には能く知られてゐる。(フランスの『ブリユ・ロアン』其他の紙上でよく知られてゐるのは勿論である——石川)

五

「他の方面に於ける誠実さと同様に、彼女が何事よりも意を注いだ母親と共に逝去したことは実に悲惨の極である。彼女の多くの友人達の親愛は決して彼女を見ずてはしなかつたらうに。否、彼女

の孤独を慰めたであらうに。併しながら彼女の行つたことは彼女自身の意思に基いたのだ。一九〇一年以来知り合つた、そして常に私に親切であつた、是等二人の友の逝去によつて、六十年間の親しき革命的無政府的追憶は永久に奪ひ去られて了つた。」

(ネットラウ)

ピエロを想う

久保〔譲〕君からフランスのピエロが〔昭和二十五年〕二月十九日に死去したことを伝え聞いた。感慨深きものがある。ピエロの名は日本のアナキスト社会にほとんど知られていないと思うが、かれの理智的な性格と地味ながら不撓不屈な活動とは西欧の社会思想家の間に高い評価をもつて尊敬されていた。二十歳前後の学生時代から七十九歳で他界するまでのかれのアナキストとしての生涯も随分長いものであった。

第一次欧州大戦後、かれが最も力を注いだのは月刊雑誌『ブリュ・ロアン』の編集発行であつた。かれの本業は医者であつたが自らの家を開放して、同志の集合の用に供することもしばしばあつた。私もパリに行つた際にはルクリュ翁に伴われてかれの家の集合に出席したことが幾度かあつた。子息も息女もあの当時すでに立派な青年であつたから、今は相当の年輩の紳士淑女であらう。

かれの『ブリュ・ロアン』誌に書く論文はいずれも科学的研究に基づく無政府革命論で、しかもそれは実証的建設的な立論をもつて終始した。中には幾月も連続し、幾号をも重ねた長大論もあつた。

この雑誌の協力者には、グジョン、インジン、アスチエ、ベルトラン、リシャル、ルクリュ等の同志が直接関係し、オーストリアのネットラウやスイスのウィンチも熱心に応援した、そして『ル・スミール(種時く人)』誌の一派とも親密な関係をもっていた。最近では『リベルテール』の一派と融合したように聞いたが、その昔は何か解けない距たりをもっていたらしかった。

一九一六年二月、第一次欧州大戦の第三年目に際しソイムメルワルドの平和促進会議が伝えられたとき、所謂十六人のアナキスト宣言が発せられた。それは講和尙早論を説いたものであった。クロボトキン、コルネリセン、ジャン・グラヴ、マラト、チエルケゾフ、ポール・ルクリュ、レイザンなどの有名なアナキストが加盟したもので、ビエロも署名者の一人であった。その論旨は「この会議にはドイツ労働者代表という本質が欠けていた。目下平和を語ることはとりも直さずドイツ内閣やビュウロウやその手先の味方となって勝負することだ」というにあった。しかるにこの宣言を口ぎたなく悪罵したのがセバスチャン・フォールと『リベルテール』一派であった、日本人として私もこの宣言に加わったので「この宣言文には文法上の誤謬や拙劣さがあるが、それは多分日本人の筆になったものであろう」とまでフォールの嘲笑的批評があった。実はこの宣言がクロボトキンの筆に成ったことを知ってことさらにからかったのであろう。

おそらく、このような関係から『リベルテール』の一派と『ブリュ・ロアン』の人々との間に多少の溝が存在したのであろう。それに『ブリュ・ロアン』の方は静かで生真面目であるのに対して、『リベルテール』の方はつねに物議を起し、スパイの潜入するところとなっていたので、その合わ

ない点も多かったのであろう。しかるにセバスチャン・フォールもルクリュもチエルケゾフもクロボトキンも死んだ後になっては、往時の葛藤などはようやく忘れられたのであろう。この両派は戦後和合して『リベルテール』を中心に団結するにいたった。そして今度はビエロ自身がこの世を去るにいたったのである。

『ブリュ・ロアン』という誌名はロシヤのボルシエヴィキ革命を見て「これで止めてはダメだ、もっと先へ!」と呼号する意味であったと思う。こうした態度で論陣を張ったビエロは実に新型のアナキストであった、アナキストの言論にも研究にも生活態度にも、この新型がようやく芽を吹き始めた今日、この先達を襲ったことはわれわれの多大の損失だと言わねばならぬ。今こそ若き後継者が大いに発憤して「ブリュ・ロアン」を呼号すべき時ではないか。